

## 『日本の植民地政策とわが家の歴史』の発刊によせて

川村晃生（かわむら てるお）

慶應義塾大学名誉教授・環境人文学者／文学博士  
「ストップ・リニア！訴訟」原告団長

人はいかなる血筋のもとに生まれるかを選ぶことはできない。日常を生きていく上で、一般にそれは大した意味を持つわけでもないが、しかし時々ふと自らの先祖に立ち戻って自身を確認し、自身の立ち位置や生き方を彼らに比して見定めるといようなことはある。それは「デラシネの不安」と言えば言えるようなものかもしれないが、たとえば山口瞳『血族』に見られるような執拗なまでの先祖探索は、それに突き動かされた一典型であろう。

本書は著者の二人の曾祖父、野々村藤助と中林思孝の代に遡って、両者が朝鮮に渡って巨万の富をなし、わが国の近代における植民地政策の一翼を担ったいきさつを縷縷と語り始め、最後は著者一家の朝鮮からの引き揚げの場面に至って筆が置かれている。これが第1部となっていて、第2部、第3部は、反原発運動に力を注いだ著者の自伝とも言ってもよいような構成になっているのだが、あえて第1部の内容を以て本書の書名としたのは、自らの血縁への慙愧の念のなせるわざなのであろうか。現に著者自身、本書冒頭の扉の頁で、これまで何度も自らの面汚しな出自を書籍に記述したいと思ったこと、そしてはや語らずにはいられない心境に至ったことを打ち明けているのである。

しかしこうした血筋の罪業は、何も著者のような立場の人だけが負うものではないはずである。なぜなら明治維新以後の殖産興業による富の蓄積と恩恵は、植民地政策の一成果として、一方で労働の搾取という犠牲はあったにせよ、国民の大半にもたらされたのであり、それは戦後の朝鮮独立後の朝鮮戦争によるわが国の経済復興にまで及んでもいる。その意味で言えば、本書第1部は、市民ひとりひとりが批判的に共有しなければならない問題であって、そこにこそ本書が世に問う核心のテーマがあるとすら思われる。

第2部、第3部は、読者もよくご存知の著者の反原発運動における獅子奮迅の活動の足跡が語られている。私自身、原発やリニア新幹線の運動に関わる中で、著者の支援をいただく機会も多いのだが、本書を読み進めていくうちに気付かされた一つの重要な事柄があった。それは第2部、第16章「日本の社会運動に対して抱いた違和感」の中に出てくる。

すなわちそれは原発反対運動の論客が、ほとんど肩書を持つ学者で、一介の市民ではないことである。また研究室のアカデミックな理論もさることながら、より大事なものは原子力で言えば放射能被害をふくむ現場の問題こそが重要とする立場である。従って、専門家の知識を吸い取った上で、その内容を咀嚼し、自分の言葉に翻訳し、自分の言葉で考えるという著者の方法を、市民ひとりひとりがいかにして手にするかを考えねばならないということになる。この専門家にまかせないという態度こそが市民運動の足腰を強くするはずだ。運動に携わる人々の、以て銘すべき一条ではなからうか。

なお本書末尾に、著者35歳の時の手になる二つの短篇小説が付されている。『逮捕』と『水男の物語』の二篇である。前者は空港建設反対運動で逮捕された老女が、検事に対して徐々に優位に立っていく話、後者は少年が山の泉で水のお化けの水男と出会って温かい交流が生じ、結氷に至って水男が消失するファンタジックな話、であるが、権力や自然環境の問題まで思考が及ぶような、才気の溢れた作品である。